毎日新聞（夕刊）

2006年（平成18年）9月15日（金曜日）

風の響き

鎌田　東二

京大植物園の価値

最近、京都大学理学研究科付属植物園を見学する機会を持った。京都のような平たんな盆地の街中に、ブナの木があることに驚愕した。ケヤキのような高木の中で、小さいがけなげに立っているブナを見て、胸が熱くなった。

その一角は苔も素晴らしく、柔らかな緑の絨毯を敷きつめたようで、世界遺産となっている下鴨神社（賀茂御祖神社）境内の糺の森の静かで荘厳な雰囲気を思い出した。

園内の巨大なヤマフジにはたくさんの蔓が絡まり、ターザンが雄叫びを上げながら、森の中から飛んできそうだ。疎水を引き込んだ水場も風情があり、池も多様な動植物の溜まり場となっていた。

この植物園は、1923年、当時の植物学教室が、珍しい植物を集めた栽培園ではなく、生態学的特色を持つ生態植物園として構想。これまで、理学部だけでなく、農学部、工学部、薬学部の研究と教育に貢献してきた。ここをフィールドとして数多くの学術論文が公表されている。

が、3年前、運営体制が変わり、植物園の木を伐採する動きが起こった時、それに見直しを求め、京大植物園のありようを長期にわたり考えていこうとする「京大植物園を考える会」が発足した。会の目的は、植物園の将来像を考えるとともに植物園の存在価値をより多くの人に問いかけ、生命研究や現代社会の問題をも議論していこうというもの。これまでに、シンポジウムや観察会の開催など活発な活動を展開している。

植物園は私の勤めている大学からも歩いて10分ほどの距離にある。現代世界における生命の多様性の問題を身近なところから考えていく貴重な動きとして今後とも支援していきたい。

（京都造形芸術大学教授）